

ひとは他者をつうじて自己確認することができ、生きていくことも実感できるのではないかという思いは今でもかわらない。ただ、他者というのが社会や人間関係を差すだけではないと思えるようになったのは大きく違う。太陽や風や雪の日々の変化や、生き物や木々の振る舞いに目をやり、それらと呼吸を合わせるようにして自分が生きていくことを感じることができるような気がしている。社会的承認欲がまったくなくなつたわけではないが、それで心が不安になるといったことはなくなつた。むしろ穏やかな気持ちになれる。

こんな気持ちの変化を与えてくれたのはこの竹山の土地なのだが、思い返せば単なる偶然の出会いが、その先に自分にとって重要な意味を持つことになるとは、まったく不思議なことだ。ひとから「石塚さんは、どうして田舎暮らしのような生活をされるようになったのですか。」と聞かれた時に「それは、神様の導きがあつたからです。」と答えると怪訝そうな顔をされるが、かなり本気でそう思っている。ただ、神様はかなり雑だ。八百万いらっしゃつたとしても、それで全世界の生き物を導くとすれば、確かにかなり大変だと思う。ひとつひとつ手取り足取り導いている余裕は到底ないはずだ。そこで、とりあえず手がかりになる事柄をバラバラとまいておく。それをうまく拾えるかどうかは当人まかせ。おそらく高いところから時々気が向いたらその後の様子を眺め、一喜一憂してそれを楽しんでいないのか。

友人から「隣の土地が売りに出ているんだけど買わないかい。」と湿地同然の土地を紹介され、まともに取り合わないのが普通だと思う。それを魔がさしたように買ってしまい、野遊びの場所程度に思つていたのが、いつの間にか老後の蓄えを使い果たして住まいをつくることになり、今は、ここを終の住処と思つている。そして、そのことが引退後の自分を見つけることになるとは。何がその先の自分に重要な意味を持つてくるのか見分けるのは無理だと思うが、何か心にひっかかるものがあれば、それはもしかしたら神様が蒔いた導きの種なのかもしれない。その種は誰か特別な人にだけ与えられるものではなく、誰にでも与えられるものでありそうだ。というか、かなり雑にバツと蒔いているような気がする。それに目を向け手を出すことができるかどうかはその人次第。そういうことなのかもしれない。

今はコロナ禍でそれまで当たり前前にできていたことを慎重に、あるいは抑制して行動しなければならぬ状況になっている。もし、今でもまちなかのマンション暮らしをしていて、現役から完全引退したあとにコロナ禍の状況に置かれたら、私たちは、いったいどのような生活をしていたのだろうかと思う。神様は、そこまで見通して種を蒔いたのかはわからないが、この竹山の土地に導いてもらったのには深く感謝している。

最近わかったことだが、神様は私たちのことだけでなく竹山のこの地の将来も見越してこの地に導いたのではないかと思う節がある。そのことについては、もう少しあとになっていから触れたいと思う。

